

伊丹市文化財ボランティアの会 火曜会通信

第44号

発行日：平成22年2月1日
発行：伊丹市文化財ボランティアの会
発行所：伊丹市千僧1丁目1番地
伊丹市教育委員会事務局内

新年を迎えて 会長 池田 利男

新年明けましておめでとう御座います。

今年には2010年・21世紀に入ってから十年が過ぎました。この10年間は20世紀の延長のような世相でしたが、2010年よりは、いよいよ輝ける21世紀の始まりとなると思われま。さて、我々の火曜会も15周年を迎えます。平成8年度の第1期より15年間、数々の事業を実施して、我々の身の丈にあった範囲内で、やれることはやってまいりました。会員の皆様のご努力と御研鑽の賜物がこの15年間です。



我々の会の目的は文化財を愛し、勉強してその成果を市民の皆さんに還元することを、生涯学習としていますので、会員の皆様は日々楽しく元気で友愛の精神で過ごそうではありませんか。

伊丹市教育委員会生涯学習部 副参事 石堂 行文

新年あけましておめでとうございます。

本年は皆様方の伊丹市文化財ボランティアの会が、設立15年をお迎えになることとなります。また、伊丹市も市制誕生70周年の年であります。

このような記念すべき節目の年を起に、皆様方とともに文化財を活用したロマン事業の充実を進め、より多くの方々に伊丹市の文化財への関心を高めていただけますよう、取り組んでまいりますのでご支援をお願い申し上げます。皆様方のますますの御健勝・御多幸をお祈りいたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。



2月～4月の予定

- 第15回 伊丹市文化財ボランティア養成講座開催(1/26～3/2) 3/20 市内史跡めぐり
- 定例会 2/9(火) 3/9(火) 4/12(火)総会
- 紙芝居 2/3(水)石橋家住宅にて「三軒寺の砂かけ狸」を公演予定
- 3月3日(水)から岡田家酒蔵でのガイドを再開(水木金土日の午後)
- ガイドの予約申し込み状況 2月6件 3月3件の予約を受付
- 歴史ロマン体験学習支援 2/20(土)流し雛作り 3/6(土)行燈作り



伊丹ロマン事業での活動

田中 實

今年も10月31日から11月28日まで伊丹ロマン事業実行委員会による「歴史・文化が醸し出す伊丹ロマン事業」が市内各所で開催されました。今回は3回目で「有岡城・伊丹郷町の近代」をテーマに参加団体による現地見学会、各種展示会、各界講師による歴史講座・講演、市民参加による市内史跡（有岡城跡・伊丹廃寺・御願塚古墳）一斉清掃が行われました。

各催しへの参加者は、事務局（伊丹市教育委員会）によると約15000人と非常に盛況でした。ただ11月1日の有岡城跡でのオープニングイベントが直前の降雨によりあいにく中止になりました。

次に伊丹市文化財ボランティアの会の活動を報告いたします。当会では「現地見学会―昔と今の郷町を歩こう」でのガイド、企画展示会「伊丹の暮らし」での案内・監視業務を分担し、市内史跡一斉清掃に会員が手分けして各箇所へ参加しました。その他各イベントにも多数の会員が参加したようです。オープニングイベントでの紙芝居は前述のとおり残念ながら取りやめになりました。当会分担の催しについて簡単に説明しておきます。

◎現地見学会―「昔と今の郷町を歩こう」 11月14日1:00pm～4:30pm

郷町内およびその周辺の近代の建造物は阪神大震災や都市再開発により少数しか残されていません。そこで今なお存在するこれらの貴重な建造物と旧街道、鉄道の沿革などを紹介しました。新しい試みでしたが、見学者、スタッフを併せてほぼ50人近くの参加者となりました。

コースは下記のとおりで6人の会員（保理江、杉本、坪倉、濱田、松木、田中）が旧大坂道、旧米屋町と近辺の古民家をガイドしました。

JR伊丹駅前～（市バス）～大阪機工（事務所棟）～（市バス）～東リ（事務所棟）～旧大坂道（古民家）～米屋町（古民家）・旧岡田家。



旧大坂道・古い街並

◎企画展示会「伊丹の暮らし」10月31日～11月18日まで月曜館日を除く16日間 10:00am～5:30pm 展示会場旧岡田家内

近代の伊丹郷町を体感してもらうために町家や街並みの復元、昭和時代の日用品の再現、伊丹郷町遺跡で出土したガラス製品等の展示、大正から昭和にかけて「伊丹町所見」「建国祭」「楠公祭本泉寺」「伊丹祭り」の映像紹介をしていました。

延48人の会員が上記期間中、展示の案内・監視に従事し、1,300人～1,400人の見学者に対応しました。



宝塚巡礼街道を歩くに参加して

田中 良子

10月27日(火)は木曜班担当の屋外研修の日です。テレビからは又20号の台風が近づきつつあるとのニュース少し心配でした。当日朝6時過ぎザーッと一瞬雨が降りましたが、さっと上がって青空。丁度良いお湿りをもらい、上々の散策日和となりました。10時前、阪急山本駅に参加者31名が集合。宝塚市教育委員会の直宮憲一さんが本日ガイドして下さる事となり、挨拶と巡礼街道の簡単な説明を受け「サア一出発で一す」。山本という所は私が幼い頃、どこそこ村の誰々ちゃんと呼んで遊んだ頃の面影がまだまだ残る所でした。狭い道幅に昔通りの建物が多く残り、その家の横には畑もある緑も多く、静かな佇まいのいい所です。その横を小川が流れている。車が一台通る度に「ハイ車が通ります横によって気をつけて」等お互いに声を掛け合

って和気藹々ゆっくり歩行で、痛めて歩けるかなと心配していた足も快調。さて巡礼街道とは平安貴族の間で盛んになった観音信仰が観音霊場巡りとなり、江戸時代に入ると一般の人々の間でも盛んになったものです。今日歩いた中山寺は西国三十三ヶ所の24番札所です。一番は那智勝浦の青岸渡寺から始まり、近くは箕面の勝尾寺の23番札所そして西へ続き三田市の花山院（番外）や加東郡社町の清水寺へと到ります。これが巡礼街道だという事もこの度はじめて知ることが出来ました。直宮さんに感謝です。

本日のルートは先ず山本駅前の木接太夫の碑、ここ山本が日本三大植木の産地で中興の祖として木接太夫の碑がたっている。ここから西へ松尾神社に出ます。この神社はお酒の神様で有名な京都松尾大社の末寺です。泉流寺、正念寺、伝馬神社とお参りし中筋の天神川沿いのしだれ桜を見て中山寺へ到着。中山寺は紫雲山中山寺といい、真言宗です。このお寺は、もとは現在の寺域から北西の山中（今の奥の院あたり）に建っていたのですが、荒木村重の焼き討ちにあいことごとく焼失。現在の中山寺は豊臣秀頼が再興しました。中山寺は安産信仰で有名なお寺です。明治天皇がお生まれになるとき安産祈願所としてその後全国にその名を知られるようになりました。境内西側閻魔大王の横の所に7世紀初頭の古墳があり、家型石棺と横穴式石室があります。お詣の折には一度見てくださいね。中山寺への道標は宝塚に数多くあるそうですが、伊丹でも見かけます。中山を過ぎ、売布神社、日本画家橋本関雪の別邸前を通り、最終清荒神さん参道入り口前に1時に到着。ここで清荒神さんの説明を聞き、みんなで直宮さんに礼を述べて解散。本当に参加してくださった皆さん有難うございました。



北条早雲の生き方が教えるもの(1)

(5回連載の1) 浜田 辰洋

北条家・五代百年の基礎を築いた北条早雲。いかにして乱世に道を開いていったのだろうか。激烈な戦いを勝ち抜いた早雲の生き方を紐解く中で見えてくるのは、修養に努め、領民の幸せを願った将の一面だった。

北条早雲(ほうじょう・そううん)永享4年(1432)生まれ。没年不明。戦国時代の武将。伊勢新九郎盛時と称した。駿河(現在の静岡県)の今川氏を頼り、後に一城主となった。その後、堀越公方を討って韮山に進出し、明応4年(1495)小田原城を奪い、ここを拠点として南関東に勢力を拡大。後北条氏五代の基を開いた。「早雲寺殿21個条」は家訓の代表例とされる。

北条早雲は悪逆非道百人物か？

関東を治めていた北条氏が、21万人とも22万人ともいわれる豊臣秀吉の軍勢に包囲され、小田原城を明け渡したのは天正18年(1590)のことです。この降伏まで北条氏がこの地を平定した期間は五代百年に及びました。戦国大名の大半が長くても三代で終焉を迎えていることを考えると五代百年という記録が如何に稀有なことが分かります。その要因を探っていくうちに、戦国武将の先駆けともなった初代北条早雲の将としての高い意識があとの代まで受け継がれていたことが明らかになってきます。北条家だけではありません。豊臣秀吉や徳川家康などもまた早雲に学び、その礎を確固たるものにしていったことを思えば、私はそこに古今東西に通じる将の条件が見えてくるような気がするのです。

ところで、私たち日本人にとって北条早雲は決していいイメージばかりではありません。むしろ、その名前を聞いて「戦国三梟雄」という言葉を思い浮かべる人もいらっしゃるでしょう。斎藤道三・松永久秀と並ぶ戦国時代の三悪人という意味で、ここからは手段を選ばず力任せに領地を獲

得していった血も涙もない武将といったようなイメージが浮かび上がってきます。一方で「北条記」「北条五代記」という古書を紐解くと、それとは反対に早雲の善政が如何に領民に喜ばれたかが随所に記されています。もちろんこれらの書物は北条氏の立場で書かれていますから、公平さに欠けるのは確かですが、そのギャップはあまりにも大きいものがありました。私が早雲を勉強するに当たって、大きな理由の一つはその真実を確かめるためでもあった。早雲の生き方を探りながら、早雲がいかにか人々の信望を集めながら国々を平定していたか、将としての精神的骨格を培ったものは何だったかを見ていくことにします。(続)



鉄砲伝来異聞 亀井 尚

鉄砲を火器に使った本格的な戦争は、信長と武田勝頼の長篠の合戦が世界最初というのがこれまでの史実である。歴史家は鉄砲隊が三列横隊に並び、第一列が一斉に撃ち込むと最後列に下がり、二列目が銃を構え武田の騎馬軍団を打ち倒す、火縄銃だから火薬を補充し、玉をこめるのに手間がかかり、その間、騎馬軍団に蹴散らされてしまうからだ、「講釈師見てきたようなウソをつき式」の話を堂々史実としてきた。あまりにも信長を戦術の大天才とほれ込んだために、信長ほど偉大な歴史上の人物はいないかの記述が幅を利かせていた。しかし、鉄砲の名手は、根来衆であり、雑賀衆で、石山本願寺攻めで、公家を仲立ちに和睦し、本願寺宗門も潰さなければ、大阪の寺内町もそのまま本願寺を擁護して戦った多くの雑賀、根来衆、多くの武将もお咎めなしこんな寛大な信長の戦争の結末は前代未聞、石山本願寺の鉄砲隊に屈したからといえる。**歴史のかたち** 種子島から来た鉄砲 (2,3年前の読売新聞に掲載)

読売新聞に掲載されていた記事を参考に種子島銃のコピー1号、その後の生涯につ

いて話を進めたいと思うが、参考資料の掲載年月日が不明である点ご容赦ください。

鉄砲伝来の歴史教科書では、南蛮船が嵐にあつて、種子島に漂着し、乗っていたポルトガル人がもたらした・・・が定説になっているが、最近の教科書では「ポルトガル船ではなく、交易が目的の中国人倭寇の船だった」と、これまでの定説と違った紹介をしている。年代は天文11年(1542)、と「鉄砲伝来記功碑」に彫られた石碑には、天文12年(1543)とあるが、それより一年前のことだと言う。この伝来の年についてはポルトガルの「諸国新旧発見記」には1542年とされている。

ともあれ、種子島に鉄砲がもたらされたのは偶然の産物ではなく中国人倭寇は密貿易を東南アジアや日本近海で行っていた関係上、ポルトガル人とも関係があり売り込みに来た、歴史の必然で、偶然ではないと、また船籍は中国船であると確定的だ。浜辺で島の役人が最初に会った人物は「五峯」なるもので筆談を交わしたという。中国側資料では「王直」で中国倭寇の大頭目であることが分かったからだと言う。

14代島主の種子島時堯(たねがしまときたか)は二人のポルトガル人から鉄砲射撃を見せられ、驚嘆し、「希世の珍なり」と2丁を買い求め、島の刀鍛冶の八坂金兵衛に模作を命じると共に、1丁は噂を聞きつけてやってきた紀州根来寺の僧兵集団「根来衆」の津田監物に贈った。堺から来た商人の橘屋又三郎は、金兵衛のもとで製法を習得して帰った。かくして種子島発の鉄砲は国内に広まったというのが鉄砲伝来の定説だが最近ではこれに？マークがついている。まず時堯に鉄砲を撃って見せたのは中国人の商人で、その商人から鉄砲を購入したという。この鉄砲記は江戸時代に入ってから時堯の功績をたたえる目的で16代島主が薩摩の儒僧に書かせたものだという。中国宋の時代から日宋貿易が盛んで、平清盛が改修した港。大輪田泊は日宋貿易の一大港だった。神戸女子大学の山内晋次教授は「東

は日本から西はペルシャ湾や紅海まで、宋は海を通じて世界各地から硫黄を大量に輸入していた」。山内教授は絹の道（シルクロード）をもじった硫黄の道（サルファーロード）と提唱する。宋が硫黄を必要としたのは火薬原料のため。ではその硫黄のわが国での一大産地は、僧俊寛らが鬼が谷で平家打倒を謀議していた廉で流刑となった。その流刑地「鬼界島」であろうとする。又、中国はジャワ島東部のメラピ火山帯特産物の硫黄を大量に輸入していたという。

宋貿易が途絶えた後も鹿児島は鬼界島の硫黄を通して中国と古くから公益の実績があったとすると種子島に登場する中国船は、嵐にあつて種子島に漂流したのではなく目的を持って種子島に寄港した。又、中国船は、古くから鹿児島界限を交易のため、頻繁に来航していたことになる。そこで、火薬を使った鉄砲の威力をデモンストラーションのために種子島でそれを行ったのではないかと見る。

アンダーラインの箇所は毎日新聞 10 月 21 日夕刊「貿易でつながった平家物語の流刑の島」引用、参照。



自然の遺産 丹波竜について

14 期生 足立 茂夫

11 月 10 日、伊丹市文化財ボランティアの会の秋季研修バス旅行が行われ、三田市の県立「人と自然の博物館」から篠山市の篠山城・篠山美術館等を巡る 1 日であった。

前日の予報では朝からの雨を覚悟していたが朝の空は曇り空で一安心どうか一日降らないでくれよと願いつつ家を出た。市役所前へ着くとバスは既に来ていて資料等を貰いバスに乗り込み世間話をしている内にバスは予定通り出発。高速入口付近で少し混雑したが道中は車の流れも良く、車中での定例会も終わらぬうちに予定より早く第一目的地へ到着、少し早目の見学が始まった。まず驚いたのが建物で聞いてみると、この博物館の上が遊歩道橋であるとの事。

なんでこうなったのか更に説明を聞くと、元々この場所は谷底で東側に神戸電鉄の駅と県道があり、その反対にマンション群が建ち並び最短の連絡歩道橋として建設された。そして平成 10 年(1998)にフェニックス兵庫の一環として博覧会を開催するにあたり連絡橋の下に橋脚を利用してパビリオンが建てられたとの事、一見分からないが私たちが入館した玄関は建物の 3 階にあたるそうです。

館内の説明を順次聞きながら恐竜パネルの場所に来ました。パネルを見てびっくり、私の名前がお二人になっている。足立冽(きよし)さんと・村上茂(しげる)さんの事。展示してある恐竜化石は平成 18 年 8 月(2006)、足立さんが地層を観察し資料を集めるために大学時代からの友人である村上さんを誘って篠山川に出かけ、偶然にも村上さんが地層から飛び出している灰色の物体に気づいた。大きな動物それとも恐竜の骨ではな



いかと考えた二人は真夏の炎天下掘り続け後で肋骨と分かる細長い骨と椎骨を掘り出した。後に掘り出された物体は自然博物館に運ばれ恐竜の骨であると確認され、丹波竜と名付けられ大々的に発掘されるようになりました。発見された場所は現在コンクリーで覆い保護され次の発掘を待っているとの事、次はどんな発見があるやら楽しみである。今回の研修会で文化的遺産とは違った自然遺産を知ることが出来、有意義な 1 日であった。まだまだ謎を秘めた丹波竜、これからの発掘に注目したいと思います。そして研修旅行の約 2 週間後、11 月 27 日の朝刊に「足立さんが新しい恐竜、3 度目の大発見」と大きく報じられていた。

主な活動記録

ガイド実施記録 (09.11～10.01)

	2009年11月		2009年12月		2010年01月		09.04～10.01累計	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
月							1	15
火							4	100
水	3	57	1	77	1	14	8	265
木	1	5	1	20			8	237
金			2	26	2	142	10	294
土	1	66	1	144			5	327
日	2	47	1	35	1	30	6	137
計	7	175	6	302	4	186	42	1375

ガイド内容

11月 A・Bコース 岡田家 有岡城/岡田家各1回 岡田家/石橋家3回 (芦屋 吹田 伊賀上野 堺ほか)

12月 A・B・Cコース 特別コース 岡田家 岡田家/石橋家各1回 (神戸 尼崎 伊丹ほか)

1月 Aコース3回 岡田家/石橋家1回 (神戸 大阪 堺 園田から)

水曜日G屋外研修

1/20(水) 大阪四天王寺から住吉大社を訪ねて歩く (水曜日メンバーが適宜説明を行った)

新年会

1/21(木) 午前中は定例会、午後から新年会を開催。カラオケにダンスにコマ回し、南京玉すだれと多彩な演芸で大いに盛り上がり会員相互の親睦を図ることができた

どんぐり座

現在、新題材の紙芝居・ペープサートを作成中。完成後、定例会で披露の予定

伊丹ロマン事業支援

10/30(土)～11/18(土)企画展示「伊丹の暮らし」のガイド(岡田家酒蔵)

11/14(土)「現地見学会ー昔と今の郷町を歩こう」大阪機工・東リの事務所棟の見学と旧大坂道・米屋町と近辺の古民家を、一般市民を対象に案内した

歴史ロマン体験学習支援

11/7 (土)銅鐸ローソク作り 12/5 (土)万華鏡作り 1/23 (土)勾玉作り



編集後記

ついこの前「明けまして・・・」と言っていたと思ったのに、もう2月。三寒四温を繰り返して春はやってくる。「一生懸命やれば知恵がでる 中途半端だと愚痴がでる いい加減だ」と言い訳をする」何処かで聞きかじったことのある言葉。この言葉を肝に銘じ今年も頑張りたい。(TR)